

菅原道真作品研究

「秋湖賦」注釈

焼山廣志

菅原道真の作品群の中で「賦」と呼ばれる文体の作品として「秋湖賦」「未旦求衣賦」「清風戒寒賦」「九日侍宴重陽細雨賦」の四篇が現存している。

先に拙稿で「未旦求衣賦」「清風戒寒賦」を取り挙げ解釈を試みた（注一）が、今回はそれに続いて「秋湖賦」に的を絞って作品考察を深めてみたい。

この作品は『本朝文粹』にも収録されている。注釈としては既に柿村重松氏の『本朝文粹注釈』の中で詳細な出典考察がなされているし、最近では金原理教授が「秋湖賦」の韻律、典拠の詳しい、的確な指摘をなされた論文（注二）を公にされている。

今回の拙論は先学、とりわけ前述の柿村氏、金原理教授二者の業績の重複のそりしをまぬがれないが、筆者は現在、道真の賦に注釈をほどこす一連の作業を進めている。その一貫として

若干付加する点も残されていると思われるので改めてこの作品を取りあげ考察を試みた。

「秋湖賦」は題辭に「以秋水無岸為韻。二百字以上成篇」とあるように、限韻の賦で、指定された押韻の字は「秋」「水」「無」●「岸」の四文字で四回の換韻がなされている。そして押韻の字を並べると「秋水岸無し」の意がそこに込められていることがわかる。さらに「二百字以上」という字数制限が付された作品である。全文を換韻毎に段落分けを行い、四段落に分割して以下、解釈を試みたい。今回も前稿と同じように（注一）全文の解釈に徹した作品論を展開してみる。

この賦は前述したように『本朝文粹』にも収録されている作品である。本文は、新日本古典文学大系本『本朝文粹』に従った。訓みは川口久雄氏校注日本古典文学大系本『菅家文章・菅家後集』及び静嘉堂文庫蔵近世初写本『本朝文粹』を参考にし、私に訓みを施した所もある。注釈は『本朝文粹注釈』で詳述されている柿村重松氏の注、及び前述の金原理教授の論文の学思

に抛る事大である。

二

○秋湖賦 以秋水無岸為韻。

二百字以上成篇。

〔平水韻〕

客有りて湖頭に在り

日惟れ西に暮れ

年也 季秋なり

同類の羸れたる馬に策ち

繋つながざる虚舟を嗤あざける

是に

下平声

十一尤韻

商颺 瑟瑟として

沙渚 悠悠たり

波浪を掬くびて以て心を清

め、斗藪を求めず

郵亭を望みて以て宿を問

ふ、何の暇いとありてか流れ

に枕せむ

行路の艱澁と云ふと雖ど

も誠まことに是れ、歳としを卒おふる

優遊ゆうゆうなり

※「○」は平韻、「●」は仄韻、「◎」は平声の押韻、「●◎」は仄声の押韻、「△」は題韻、「□」は対句を示す。以下、同じ。

通釈

○

客人が一人有りて湖の辺りにたたずんでいる。時はまさに夕暮れ、日没の頃。時節は晩秋の候。病み疲れた馬に鞭打ちて旅路を急ぐ様は縄につながれていない波間に漂う小舟のようである。そんな我が身を顧みて、思わず苦笑してしまふ。

ここに於て湖水の辺りを秋風が瑟瑟と吹き水際の砂洲は、はるか遠くまで続いている。湖水を手ですくって飲むと（ただそれだけで）心が清らかになるようで、（とりたてて）仏道修行をし欲塵を払う必要性も感じない。

しかしながら今は今夜の宿舎を前方に見える郵亭に求めなければならぬ日没時にあたり、どうしてゆっくりと湖水の流れに身を清めるような時間的余裕があるのか。（あるはずもない）馬は疲れ、旅路も難渋とは知りつつも、晩秋の、そして日没前のたつぷりと水をたたえた波穏やかな湖水の周遊は、一年の終わりの優遊でなくてなんであろうか。

語釈

○

○季秋 秋の末。陰曆九月の異称。晩秋。『禮記』『月令』に「季秋之月、日在房、昏虚中、且柳中」。『淮南子』「時

雖云行路之艱澁
誠是卒歳之優遊

於○是
商○颺○瑟○瑟
沙○渚○悠○悠
掬○波○浪○以○清○心
望○郵○亭○以○問○宿
何○暇○枕○流

有○客○在○湖○頭
日○惟○西○暮
年○也○季○秋○也
策○回○類○之○羸○馬
嗔○不○繫○之○虚○舟

下平声

十一尤韻

商颺 瑟瑟として

沙渚 悠悠たり

波浪を掬くびて以て心を清

め、斗藪を求めず

郵亭を望みて以て宿を問

ふ、何の暇いとありてか流れ

に枕せむ

行路の艱澁と云ふと雖ど

も誠まことに是れ、歳としを卒おふる

優遊ゆうゆうなり

則訓」に「季秋之月招搖指戌」とある。 ○同類 (一) 虬

蹟) 疲れるさま。疲れて高い所にのぼることの出来ない馬の病。

『白氏文集』「不能亡情吟」に「駱力猶壯、又無虬蹟」とある。

○羸馬 やせ疲れた馬。『魏志』「杜畿傳」に「其爲艱難、

譬策羸馬、以取道理」とある。 ○不繫之虚舟 『莊子』

「列禦寇」に「巧者勞而知者憂、無能者無所求、飽食而遊

遊、汎若_レ不繫之舟虚而遊遊者也(器用なものは体を疲れさ

せ、もの知りは心を苦しめるが、無能なものはこれといって求

める目当てもなく、ものを食べては気ままに遊んでいる。ゆら

ゆらと波まに浮かぶ綱のきれた小舟のように虚心になつて気ま

まに遊ぶ(これこそ最高の)人だ」とある。『田氏家集』「病

後閉座偶吟所懷」に「天教方寸虚舟似」の句が、又「秋日諸客

會歌賦屏風一物得舟」に「我來唯受對虚舟」の句が見出せる。

○商颺 秋風。商風に同じ。商は五行では金、方位では西、

四季では秋にあてる。颺は大風、つむじ風。『楚辭』「東方朔

七諫、沈江」に「商風肅而害生兮」とあり(陸機、演連珠)に

「商颺漂山」とある。『文華秀麗集』「神泉苑九日落葉篇一首」

に「商颺掩乱吹洞庭」の句が見出せる。 ○瑟瑟 風の音。

〔梁簡文帝大同十一月庚戌詩〕に「耳聞風瑟瑟」とある。『昔

家文章』「山家晚秋」に「幾臨瑟瑟寒聲水」の句が、「仲秋釋

奠、聽講禮記、同賦養衰老」に「秋風瑟瑟養蟠蟠」の句が見出

せる。 ○沙渚 すなはま、また中洲の砂原。沙汀。『昔

家文章』「早霜」に「沙渚瑩添白水精」が見出せる。 ○悠

悠 行くさま。広く行きわたるさま。【辭源】には「眇邈無

期貌」と説明がある。『詩經』「王風、黍離」に「悠悠蒼天」

とある。『文華秀麗集』「江樓春望應製一首」に「悠悠雲樹盡

微茫」とある。又『菅家文章』「垂水花」に「紅句緑緑兩悠悠」

の句が、「賦得赤紅篇一首」に「擧眼悠悠宜雨後」句が見出せ

る。 ○斗數 梵語Jhūta(頭陀)の訳。ふりはらう。現

世の欲望を捨てて仏道の修行をすること。【辭源】には(皮日

休詩)「百緣斗數無塵土」と(孟郊詩)「料撒塵埃衣」の例を

戴せる。『田氏家集』「秋日遊南都諸寺」に「涼風斗數更吟詩」

の句が、『菅家文章』「誦經」に「是身斗數潔於水」の句が、

同じく「尋師不遇」に「橋上徘徊斗數情」、「扈從雲林、不勝

感歎、聊敘所觀」に「郊野行行皆斗數」の句が見出せる。

○郵亭 宿場、又宿場の宿舎。『凌雲集』「奉和春日遊獵日

暮宿江頭亭子御製」に「江上郵亭駐綵輿」の句が、『菅家後集』

「紋意一百韻」に「郵亭餘五十」の句が見える。 ○枕流

水流を枕にする。俗世の汚れを聞いた耳を水で洗い落とすこと。

水で耳を清めること。先の「斗數」に関連する語。この語は

『世說新語』にある「晉の孫楚が山林にかくれ住もうと思ひ

「石に枕し流れに漱_すがん」というべきを誤って『流れに枕するの俗

世のけがらわしいことを聞いた耳をあらうためであり、石に漱

ぐのは歯をみがくためである」と答えた故事を踏まえた語であ

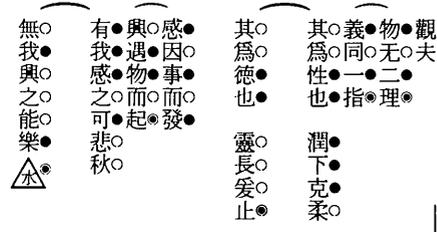
るが、そこから「負けおしみの強いこと、ひどいこじつけ」と

して使われている意味は、この賦の語には含まれているとは考え難く、孫楚が答えた「枕流欲洗其耳」の語意だけを響かせていると思われる。

『田氏家集』「九日侍宴冷然院各賦山人採藥十韻應制」に「遮棄重樓獨枕流」の句が見え、「枕流」の語注として「俗世の汚れを聞いた耳を流れて洗うこと。山人が世俗の富貴な世界を捨て山川で耳を清めるさま」と説明されている。(『田氏家集注 卷之上』七九頁) ○行路之艱澁 「艱澁」は難儀して苦しむこと。難澁。この語は「行路澁」「行路難」として日本の平安朝の詩文にも頻出する。例えば、『凌雲集』「遠使辺城」に「誰能坐識行路難」の句が見えるし、『文華秀麗集』「奉和王昭君一首」に「馬上關山遠／愁中行路難」の句がある。

『菅家文章』「寒早十首」に「馬瘦行程澁／鞭答自受頻」の句が見えるし同じく「金吾相公、不棄愚拙秋日遣懷、適賜相祝。聊依本韻具以奉謝兼亦言志」に「分任浮沈行路難／執鞭今到碧雲端」と見える。○卒歳 終歳。年の終わり。『菅家文章』「賦葉落庭柯空」に「乖閑卒歳冬」の句がある。○優遊 ゆつたりとする。優遊に同じ、『孔叢子』「獨治」に「徒能保其祖業、優遊以卒歳者也」の用例がある。【辞源】には「間暇自得貌」という説明があり、『詩経』「小雅、白駒」の「慎爾優游」の用例が挙がっている。『凌雲集』「晚夏神泉苑釣臺同直勒深臨陰心應制」に「今日優游何所樂」の句が見出せる。又『菅家文章』「堯議章」に「向背優游去」の句も見える。

①



〔平水韻〕

觀れば夫れ 物には二つの理ことわり無く 義は一つの指むちに同じ 其の性 爲ることや 潤 下克く柔かにして 其の徳 爲ることや 靈 長爰に止まる 感は事に因りて發り 興は物に遇ひて起る 我が感の秋を悲しむべき こと有り 我が興の能く水を樂しむ こと無し

通釈

この世の万物を觀察するに、物の理ことわりはすべて二様あることなく、全て同一である。湖水の性質（として例外ではなく、全て二様あることなく）も、万物を潤して、低い方に流れ、柔軟な態度で物事を成就する、その不思議な力をもつ優れたものである。川の水の徳性が、ここに集まって一体化しているのである。そもそも感興というものは事物に因りて、又触れて生じるものである。（今ここに秋の水の徳性をなみなみとたたえた湖水

を目前にし、私の詩興がわき起こってくるのを止めようがない）
そのような私ではあるが、その感興の旨は過ぎゆく秋を悲しむ
心情であつて、まだ純粹に水を楽しむ境地には達し得ていない
（のも事実である。）

語釈 ①

○一指 一本の指。『莊子』「齊物論第二」に「天地一指也。
萬物一馬也」とあるに基づく語。この「天地一指也」の注釈に
「一步を進めて物に拘れない立場から見れば天地は指と同じ
である。天地とか指とかいう名称に拘れるから区別ができる
のである。莊子は拘れる態度を排斥した。下の『万物一馬也』
も同じ」（『新釈漢文大系 莊子』一六三―一六四頁）とある
ように、こゝでは湖水も川水も性質に相違はなく同一であると
言っているのである。 ○潤下 物をうるおし低きにつき
下る。水の性質をいう。水の別名。『書經』「洪範」に「水曰
潤下」とある。 ○克柔 柔克に同じ。やわらかな態度で
相手にうち勝つ。やわらかな態度で物事を成就する。『書經』
「洪範」に「六、三徳、一曰正直、二曰剛克、三曰柔克、平康
正直、彊弗^レ友、剛克、變友柔友、沈漸剛克、高明柔克」とあ
る。 ○靈長 不思議な力をもった一番優れたもの。『文
選』「江賦一首」に「咨五才之竝用、寔水徳之靈長（ああ金・
木・水・火・土の五つのものがあるが、まったく水こそはその
中の靈長である）」と踏まえた語。小尾郊一氏の注に「『寔水

徳之靈長』は『淮南子』「原道訓」に「夫れ水は大極^トむべから
ず、深測るべからず、公無く私無きは水の徳なり」とあるに基
づくとの説明がある。（『全釈漢文大系27 文選（文章編）二』
一三八・一三九頁より引用）又、前述の金原理教授の論文に
おいても「水を「潤下」の語で表わしているのは柿村注の指摘
通り『尚書』へ洪範』に典故を仰いでのことだろうが、「克^ク
柔』であることが「其^レ為^レ徳』とするこの部分は『淮南子』
〈原道訓〉に「天下之物、漠^シ柔^ク弱^{ナル}ハ、於水^ニ然^レトモ、而大ナル^{コト}、
ト 不^レ可^クカラ極^ム、深^キコト 不^レ可^クカラ測^ル、（中略）無^ク所^レ私^トスル
而無^ク所^レ公^トスル、靡^ビ濫^振蕩^シテ 与^二天地^一鴻洞^{タリ}。是謂^フ至徳^ト」
とある一文を踏まえて理解が可能となる」と具体的に説明され
ている。（注三） ○悲秋 もののあわれを感じる秋。秋
の氣に感じていたみ悲しむ。『楚辭』「九辨」に「悲哉秋之爲
氣也 蕭瑟兮 草木搖落而變衰 憐慄兮若在遠行 登山臨水兮
送將歸 沅兮 天高而氣清 宋慶兮 取潦而水清 悽悽增歎兮」
を踏まえた語。金原理教授は更に「この部分は日本の詩人に好
んで使われた。例えば嵯峨帝に「林洞^{リテ}逢^ニ揺落^一、池清^{クシテ}
為^ニ潦^取」（『賦三秋大有年』『凌雲集』）の一聯がある」
と言及されている。（注四） ○樂水 水を楽しむ、水を
喜び好む、【知者水樂】知者は事物の理に明かできびきびして
活動的だから流動する水を好み楽しむ。『論語』「雍也」に
「子曰、知者樂水、仁者樂山 知者動、仁者靜、知者樂、仁者
壽（先生がいわれた「智の人は〔流動的だから〕水を楽しむ仁

の人は「安らかにゆったりしているから」山を楽しむ。智の人は動き、仁の人は静かである。智の人は楽しみ仁の人は長生きをする。」（金谷治訳注『論語』八十五頁）とある一文に基づいた語。金原理教授は更に「これも日本人の詩に大変よく用いられている。とくに『懐風藻』には一五例もあり、吉野の詩になかんずく八例と集中する。一例を挙げると「縦歌^{シテ}臨^ミ水智^ニ、長嘯^{シテ}樂^ニ山仁^ヲ」の如くである」と具体的に説明を付加されている。（注四）

〔平水韻〕

况復 霽而雲斷
天與水俱 窺潛魚以漁火疊
遂歸鳥以釣帆孤
山影倒穿 表裏千重之翠
月輪落照 高低兩顆之珠
勝趣斯絶 風流既殊
世間希有 天下亦無

上平声 七虞韻

況んや復た 霽れて雲断え
天と水と俱なるはや 潜魚を窺ひて以て漁火疊り
歸鳥を逐ひて以て釣帆孤なり
山影倒に穿ち 千重の翠を表裏にす
月輪 落ち照らし 兩顆の珠を高低にす
勝趣斯れ絶れたり 風流既に殊なり
世間に希に有り 天下に亦も無し

通釈 ㊦

ましてや（今は日没時であるが、これが）雨が上がり晴れわたって雲もすっかり消え去った秋空がすみわたり湖水の青さと一体となり境のなくなる日中の景であれば、いかほどの感興が生じるか言うまでもないことである。

日没時になり、あたりは暗くなると水中に深く身を隠している魚をうかがうために、漁火が重なるように輝き始める。巢に帰る鳥を逐うように（湖水から多くの舟は姿を消してしまひ、今は）釣り舟が一隻家路に急いでいるのが見えるだけである。

山影が湖水を逆さに貫き（映り）千重の翠を地上と湖水に重ねているかのようにであり、一方、月影が湖水を照らしている様は、二つの珠を地上と湖水に浮かべているかのように見える。このすぐれた趣、世俗を超越したこの遊は殊絶であって世間に、これに比ぶべきものとしてなく、天下無双のものと言える。

語釈 ㊦

○霽 はれる。雨があがる。雲・霧が消える。 ○潜魚 水中に深くひそみ隠れている魚。潜鯉。「袁宏、三國名臣序贊」に「潜魚擇^レ淵、高鳥候^レ柯」とある。「傳玄 朝會賦」に「羅^ニ重淵之潜魚^一落^ニ九天之高禽^ニ」とある。 ○窺 穴やすきまからこっそりのぞき見する ○漁火 いさりび。魚舟の燈火。魚を寄せるために燃やすかがり火。「張継、楓橋

夜泊詩」に「月落鳥啼霜滿天、江楓漁火對愁眠」とある。

『凌雲集』「正五位下林宿禰姿婆二首自山崎乘江赴讚岐在難波江口述懷贈野二郎」に「漁火通宵烈、商帆拂曙逢」とある。又

『菅家文章』「晚春遊松山館二」に「釣歌漁火非交友、抱膝閑吟濕巾」とあるのが見える。○疊 たたみ重ねる。重なる。○歸鳥 時にかえる鳥。帰禽。○釣帆孤 一

隻の釣舟。孤帆。「杜甫、秋日題鄭監湖亭二」に「磨滅餘三篇翰、平生一釣舟」とある。『菅家文章』「雨晴對月、韻用三流字一應レ製」に「暗煙煙塞吹霜角、遙夢晴江掉釣舟」とある。又「孤帆」の例として『文華秀麗集』「夏日臨泛大湖一首」に

「風前翻浪起、雲裏落孤帆」とあり同じく「秋朝聽雁寄渤海入朝高判官積録事一首」に「大海途難涉、孤舟未得廻」とある。

「江上船」では「晴初駐蹕馳玄覽、一點孤浮江上船」と見える。『菅家文章』「冬夜有感簡藤司馬」に「送却孤帆煙水遠、知君獨臥夜衣寒」など見える。○山影 山のかげ。『水

經』「漸江水注」に「麻潭下注二若邪溪、水至清照、衆山倒影、窺レ之如レ昼」とある。『菅家文章』「黃葉」に「影映山邊水、枝凋晚後霜」と見える。○倒影 かげをさかさま

にする。又さかさまにうつる影。「高駢、山亭夏日詩」に「綠樹陰濃夏日長、樓臺倒レ影入二池塘」とある。○穿

うが。貫く。○表裏千重之翠 千重の緑を地上と湖水に重ねている。この語は既に『本朝文粹注釈』で柿村氏が、又前述の金原理教授の論文（注四）で既に指摘されているように

『白氏文集』「春題二湖上二」の「松排三山面二千重翠」の表現、及び「八月十五日夜同諸客翫月」にある「嵩山表裏千重雪」の表現に拠つたものと考えられる。（注五）○高低兩顆之珠

二つの珠を地上の天空と湖水に浮かべている。この表現も「裏表千重之翠」と同様、『白氏文集』「春題二湖上二」にある「月點二波心二顆珠」の表現、及び「八月十五日夜同諸客翫月」中の「洛水高低兩顆珠」の表現をそのまま使用している。

（注五）なお、道真のこうした表現手法について金原理教授は詳しい言及をなされている。（注四）○勝趣 すぐれた趣。勝致。「錢起、尋三華山雲臺觀道士詩」に「秋日西山明、勝趣引二孤策」とある。○風流 みやびやかなこと。

俗事を捨てて高尚な遊をすること。風雅。『晉書』「樂廣傳」に「廣與三王衍二俱宅二心事外、名重二於時、故天下言二風流」者以三玉樂一爲稱首一焉。」とある。日本の漢詩文にも多く散見している。例えば『文華秀麗集』「七日禁中陪宴詩一首」に「風

流變動一國春」と見えるし、『田氏家集』「奉答祝草雨兒詩」に「知君猶未倦吟詩、且惜風流且療治」とあり、同じく『菅家文章』「寄三巨先生二乞三畫圖二」に「山水從無膽去、願馮君得

寫風流」と見え、又「衙後勸三諸僚友二共遊三南山二」に「州民

縱訴監盜盜、此地風流負戴還」などが見える。

④

嗟呼
意不相忘
憂須以散

敘旅思之所邊涯

喻湖水之無涯者也

〔平水韻〕

去声

十五翰韻

嗟呼
意、相ひ忘れざれども
憂へ 須らく以て散ずべし

旅思の邊涯とする所を敘すべし

湖水の涯岸無きに喩ふるなり

通釈

④

ああ、この晩秋の湖水の風景に身を浸すと私の心は、(魚が水の豊富なひろびろとした湖水で自分の思うがままに泳ぎ回っているかのように)「我と物とが一体となって自由な気分になる域までは達し得ていないが、旅の憂えは、この勝景によってきつと解消されるに違いない。

以上、ここに旅路の中で味わった全ての思いを、それがなみなみと豊かな水量をたたえた空と境のない湖水に喩えて記すことで終わりにしようと思う。

語釈

④

○相忘 あい忘れる。我と物と一つになって自由無碍な心境をいう。道真のこの語には『莊子』の次の内容が踏まえられて

いるのではないかと考える。『莊子』「内篇、大宗師第六」に「泉涸、魚相與處_レ於陸_一。相响_レ以_レ濕、相濡_レ以_レ沫。不_レ知_レ相_レ忘_レ於江湖。與_レ其鬻_レ堯而非_レ桀也、不_レ知_レ二兩忘而化_レ其道_一」の一文がある。「相忘於江湖」の語釈には「水の豊富なひろびろとした川や湖で、相手など考えずと思うがままに泳ぎまわることを用いる。せせこましい世間で愛情だ親切だといつても、それは相対的世界の苦しみに伴うものにはすぎない。それより人情などを超越した絶対の世界で優游自適したほうがよいのである。」と説明がある。(『新釈漢文大系7 莊子』)又「孔子曰、魚相_レ造乎水_一、人相_レ造乎道_一。相_レ造乎水_一者、穿_レ池而養給、相_レ造乎道_一者、無_レ事而生定。故曰、魚相_レ忘乎江湖_一、人相_レ忘乎道術_一」の一文がある。通釈は「孔子が言うには、魚は水に生き、人は道に生きる。水に生きるものは池を掘れば栄養が取れるし、道に生きるものは俗事に煩わされず心が安らかです。故に『魚は川や湖で相手を忘れ、人は道の世界で相手を忘れる』といわれる。」とある(『新釈漢文大系7 莊子』内篇大宗師第六)

更にこの道真の賦の「意不_レ相忘_一」と「憂須_レ以散_一」の対句の表現は前述した③段中の「有_レ我感之可_レ悲_レ秋_一」と「無_レ我興之能樂_レ水_一」の対句表現と類似した内容と思われる。つまり、道真が日没時の晩秋の湖水の景を見て感興に浸っているのは、純粹に『論語』でいう「水を樂しむ」域に達しているからではなく、「悲秋の情」から発したものだとして述べている③段

の表現と、この④段の、湖水の景を見ての心情が、『莊子』でいう、「魚が川や湖でのびのびと泳ぎまわるといった自由自在」の域に達してのそれではないものの、「この心情だけでも充分旅中の疲れは消え失すものだ」の表現に同趣旨の発想が込められているように考える。

○旅思 旅路の思い。客心。旅魂。「王勃、羈遊餞別詩」に「寧覺山川遠 悠悠旅思難」とある。『菅家文章』「秋日山行二十韻」に「每有涼氣到 空令旅思焦」と見えるし、「重陽節待宴、同賦」天淨識「賓鴻」應製に「賓雁莫數人意動 向前旅思欲何如」とある。○邊涯 かぎり。はて。○涯岸 水のきし。水涯。かぎり。さか

い。「庚信 哀江南賦」に「江淮無涯岸之阻、亭壁無藩籬之固」とある。『菅家後集』「奉感下見獻臣家集」之御製上、不_レ改_レ韻、兼_レ鼓_レ鄙情一首に「思覃父祖無涯岸 誰道秋來海水深」と見え、「九月後朝、同賦」秋思一 應_レ制に「君富春秋臣漸老 思無涯岸報猶遲」と見える。

注一 拙稿

○菅原道真研究―「未旦求衣賦」注釈―

〔「有明工業高等専門学校紀要」第三十二号〕

○菅原道真研究―「清風戒寒賦一首」注釈―

〔「有明工業高等専門学校紀要」第三十三号〕

注二 道真の賦―「秋湖賦」試読―

金原 理〔「国文学 解釈と鑑賞」平成2年10月号〕

注三 道真の賦―「秋湖賦」試読―

金原 理〔「国文学 解釈と鑑賞」平成2年10月号〕

六十八頁、六十九頁

注四 道真の賦―「秋湖賦」試読―

金原 理〔「国文学 解釈と鑑賞」平成2年10月号〕

六十九頁

注五 「表裏千重之翠、高低兩顆之珠」の表現について

【出典考】

『白氏文集』（その一）

◎春題湖上

湖上春來似畫圖

亂峰圍繞水平鋪

松排山面千重翠

月點波心一顆珠

碧綾線頭抽早稻

青羅裙帶展真蒲

未能拋得杭州去

一半勾留是此湖

（傍線 筆者）

『白氏文集』(その二)

◎八月十五日夜、同諸客翫月

月好共傳唯此夜

境閑皆道是東都

高山表裏千重雪

洛水高低兩顆珠

清景難逢宜愛惜

白頭相勸強歡娛

誠知亦有來年會

保得晴明強健無

(傍線 筆者)

(大学院第七回修了・有明高専)